

# 研究総論

## 研究主題「学びをつなぐ教育の創造」（3年次）

～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実～

### 1 主題設定の理由

#### (1) 本校におけるこれまでの研究

前研究では、研究主題「学びを結びつける力の育成」に取り組んできた。1年次は、子供がよりよい自己を目指して学び続けるために、教師の働きかけを工夫することにより、資質・能力の3つの柱を相互に働かせる力の育成を目指してきた。1年次の研究の成果として、子供が既存の知識・技能を活用して思考を深めたり、学習に向かう態度や能力を高めたりすることにつながる働きかけを見出すことができた。しかし、子供に学んだことや学び方のよさを自覚させるための働きかけを明らかにすることについては課題が残った。

2～3年次は、子供一人一人の思いや実態を見とり、それらを生かしていくことへの教師の課題を解決するために、教育目標を具現化した6年間の姿を系統的に描き出した「整理表」を創った。そして、私達は、この「整理表」を見とった子供の学びや育ちを価値付けたり、授業改善の示唆を与えたりするものとして使ってきた。「整理表」を活用しながら見直す過程を経て、多様な生活経験をもっているありのままの子供の姿を受け入れ、そこから教育を創っていくことの大切さを共有できるようになってきた。さらに、「整理表」を活用して子供の姿を丁寧に見とり、その姿から語ることは、教材研究や指導技術の向上に加えて、教科、学級、学年をつないで教育を創ることの大切さの自覚につながっていった。その様な意識の変化によって見えてきたことは「整理表（学びに向かう力、人間性等）」の「学びの自覚」「行動統制」「協働性」「社会参画」が、本校の子供の課題であるということである。

#### (2) 本校の教育目標から

本校の教育目標は、「一人一人が夢をもち、未来を生きる力のある子」である。「一人一人が夢をもつ」ためには、これから求められる持続可能な社会を、自分たちが創っていくという実感をもつことが大切であろう。さらに、新しい社会を自分たちが創るという実感は、「既有知識」を生かして課題を解決し、課題解決の過程や結果から新たに学んだことを生活の中で生かしていくことで育むことができると考える。「未来を生きる力」は、「課題を発見し、学びをつなげ、課題解決に生かしたりすることができる力」であると捉える。

一方、目の前の子供に目を向けると、私達が抱えている課題に気付く。例えば、私達が目指すのは進んで自分の考えを説明したり、仲間の考えから新たな考えや疑問を生み出したりする子供の姿であるにも関わらず、学級の中には課題解決の見通しをもてず動き出せない子供が一定数存在するという事である。私達は、常に学びの主体者である子供に価値判断を置きながら教育を創っていくことを大切にしたいと考えている。このことは、教育目標「一人一人が夢をもち、未来を生きる力のある子」の具現化につながっていくと捉えている。

子供が「学びをつなぐ」意味を理解することや主体的に「学びをつなぐ」ことは難しいからこそ、子供の学びをつなぐことを教師が意図的に行う必要がある。私達は、これまでの教育的課題から、教師も子供も「学びをつなぐ」ことが大切であり、それは個々の授業だけではなく、教育全体で実現されるべきものであると捉え、校内研究の主題を「学びをつなぐ教育の創造」と設定した。

## 2 私たちが目指す「学びをつなぐ教育の創造」について

### (1) 目指す子供像

自分事として課題と向き合い、既有知識と課題をつないだり、仲間と考え方や感じ方の交流をしたりしながら課題に取り組む（または課題を発見する）ことで、学ぶことの意味や学び方の良さを感じ、自ら学び続ける子供。

### (2) 本研究における「学びをつなぐ」教育とは

本研究では、汎用的な能力を意図的に育むためには、学校で学んだことだけではなく、日常経験を通して構成した考えである「素朴概念」も含めて「既有知識」と捉え、「既有知識」を新たな学びにつないでいくことが重要であると考え。それは、「人は知識を受動的に受け入れるのではなく能動的に構成する」という構成主義の考え方に基づいている。

さらに、「学びをつなぐ」には、子供自身が「学びをつなぐ」ことと、教師が「学びをつなぐ」ことがあると捉えている。学校教育において子供が学びの主体であるが、教師も子供の「学びをつなぐ」ための手立てを見出すことが必要である。

子供が「学びをつなぐ」とは、子供自身が学校生活や教科等の学習で出会った課題に対して、「既有知識」を活用して解決方法を見出したり、新たな課題を発見したりしていくことである。さらに、学校生活の中では、仲間と自分の「学びをつなぐ」場面も想定される。例えば、仲間の困り感を理解し、仲間のために試行錯誤しながら自分の考えを分かってもらふことや、自分にはなかった仲間の考えから新たな考えが生まれるといった場面である。このような場面では、仲間の考えと自分の考えを比較したり、受け入れたり、認めたりすることで、その仲間の考えを価値付けることができたと捉える。それを本研究では、仲間と自分の「学びをつないだ」と捉える。

一方、教師が「学びをつなぐ」には、以下の3つの視点が必要であると考えている。

#### 【学びをつなぐための3つの視点】

見とりを生かした子供理解	前研究で作成した「整理表」を活用するなどして子供の姿で語ることで、授業者が気付かなかった子供の姿の蓄積や、見とる力の向上、エピソードの記録等を指している。見とった子供の姿から授業改善、よりよい教育の創造を目指す。
教科の専門性の向上	共同研究者との共同研究、授業リフレクションから見出された子供の課題を解決するための具体的な手立ての探究、附属小学校の各教科研究部が提案した学びをつなぐための見方・考え方のまとめの共有等を目指す。
学びの環境づくり	「整理表」の見直し、教育目標と「整理表」の関連、カリキュラム・マネジメントの視点からの単元配列表の作成、小中連携の推進、沖縄県の教育課題・教育施策の方向性の理解、琉附スマイルカリキュラムの理念の共有等を目指す。また、子供が学びをつなぐ環境づくりについてどのように働きかけられるのかも吟味していく。

### 3 前年度までの研究について

#### (1) 1年次の研究について

1年次の研究は、子供の困り感や子供の関心等の現状を把握することから研究を始めていった。各学年の話し合いでは、今までの学びを生かしきれていない子供の姿、自信をもつことができず、意欲的に学習に取り組めない子供の姿、間話をよく聞くことが出来ない子供の姿、目的をもって学習に取り組むことができない子供の姿、反応や対話の意識が薄い子供の姿などについて語られた。この様な子供の姿は、一部の子供の姿であるかもしれない。しかし、教師の在り方を反省し、改善するために、学級や学年、学校全体で見ようとした時に見落とされてしまう子供の姿まで丁寧に見とり、その子供の姿を教育の出発点としようとしたのである。それは、目の前の子供に現れた課題は、教師の課題と捉えているからである。

そして、本研究が、子供と教師と地域に貢献するものであるために、課題を明確にすることを大切にしたい。そのために、「学びをつなぐ教育の創造」に向けて各自（各学年）の実践を重ね、試行錯誤の過程を研究の成果として蓄積していくこととした。本校の過去の研究「よりよく考え学び合う授業の創造」で、子供の姿を丁寧かつ柔軟に見とり、豊かに解釈することから授業を創っていく研究を行っている。その研究では、互いのずれやこだわり気付いていく子供の姿が見られた一方で、一部の子供ではあるが、自分の思いを語るだけの子供、仲間への関心が薄い子供、自分ごとになっていない子供が見られたと記されている。

そこで、私達は、教師による子供の見とりを大切にすることを継承しつつ、前研究で作成した汎用的な資質・能力の「整理表」を活用するなどして、見とった子供の姿から教師の課題を発見し、「学びをつなぐ」ことができる子供の姿への変容につながる具体的な手立てを創っていくことを目指していった。そこで大切になることは、教師が子供の学びを見とり、価値付ける力を身に付けることである。さらに、子供自身が「学びをつなぐ」によって、子供の学びを深めたり、学んだことの良さを自覚したりするようになるための教師の手立てを探究していくことを目指した。

そのために1年次の研究ではまず、「学びをつなぐ教育の創造」を追究するために、教師一人一人の相違を生かした実践を行うこととした。そして、個々の実践から見えてきた「学びをつなぐ教育とは何か」ということを共有し、互いの相違から創意を生み出すこととした。

【1年次の研究における取り組み内容及び、成果と課題】

取り組み内容	○成果 ▲課題
<p>本校の研究を地域のニーズや問題意識に応えていけるものにするため、研究方針を沖縄県の課題や教育施策を踏まえて整理した。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ グランドデザインの共有</li> <li>・ カリキュラムマネジメント</li> <li>・ スマイルカリキュラムの共有</li> <li>・ 学校教育目標と整理表の整合性の確認</li> </ul>	<p>○子供を中心に置いた研究を進めていくことを共有できた</p> <p>▲教科同士の横のつながりについて捉え直す必要がある</p> <p>▲整理表の活用については共通理解の場が必要である</p>
<p>各教科部が大切にしている見方・考え方を、研究主題と関連づけながら共有した。</p>	<p>○各教科の本質を共有することができた</p> <p>▲全教科となると共有の時間が足りない</p>
<p>授業研究会の実施。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 全体授業研究会3回</li> <li>・ 各学年別授業研究会</li> </ul>	<p>○授業研究会の回数は減ったものの、ICT機器を活用してコロナ禍でも研究を止めることなく実施できた</p> <p>▲授業リフレクションをすぐに行うことができない場合もあった</p>
<p>拡大整理表による、子供の姿の蓄積と共有。授業や生活の場面で汎用的な力を発揮していると思とった子供の姿を蓄積し共有した。</p>	<p>○自分だけでは気が付かない様々な場面における子供の姿を共有することができた</p> <p>▲見とった姿をどのように教育の改善・創造へと生かしていくのか模索する必要がある</p> <p>▲学期ごとに比較するなど、子供の変容が見えやすくなるような工夫が必要である</p>
<p>整理表をバージョン2へと更新した。</p>	<p>○前年度の反省を生かし、文言をシンプルにするなど改良を加えることができた</p> <p>▲整理表活用の幅を広げたり（子供板など）、使い方を交流したりする場が必要である</p>
<p>実践報告書を作成し、本校の教育研究を地域へ発信した。</p>	<p>○研究主題を踏まえて、自分の実践を振り返る機会となり、地域教育への貢献も果たせた</p> <p>▲内容面のさらなる充実を図っていく</p>
<p>大学教員との共同研究を進めた。</p>	<p>○様々な角度からの知見を獲得する機会となり、自身の研究を客観的に捉え直すことができた</p> <p>▲授業観察や共同研究日を計画的に設定する</p>
<p>公開研究発表会を開催した。</p>	<p>○コロナ禍でもオンラインで研究を発信できたことはよかった</p> <p>▲オンライン発信の手法・工夫を模索する</p> <p>▲オンライン開催でどのようにして参加者のニーズに応えていくのか</p>

## (2) 2年次の研究について

より確かな「学びをつなぐ教育の創造」を追究するために、各教科等における「学びをつなぐために大切なこと」を確認し共有した。そして、各教科等において課題となる子供の姿から、課題解決に向けた具体的な働きかけを見出し、実践していく研究を進めた。その際、年間を通じて細かなPDCAサイクルを回すことを意識した。つまり、課題となる子供の姿に対して教師が働きかけ、その後の子供の変容を見とり（評価）、さらに働きかけを修正する、といった試行錯誤の連続である。トライアルアンドエラーを計画的に行い、「学びをつなぐ教育の創造」を求める授業実践を行った。子供自身が「学びをつなぐ」姿を目指して、教師が「学びをつなぐ」ために必要な3つの視点について授業実践を積み重ね、主題にせまっていくこととした。

### 【学びをつなぐ3つの視点から、2年次で特に意識したこと】

#### ①「見とりを生かした子供理解」に関連して

「整理表」を活用するなどして実際の子供の学びの在り方を蓄積したり、目の前の子供のニーズや現状を把握したりして、よりよい教育の創造を目指す。さらに、教師の見とりの質をどのように高め、見とりを子供の育ちにどう生かすのか、具体的な働きかけを見出すことを目指す。

#### ②「教科の専門性の向上」に関連して

教科の枠を越えた学びのつながりや、学びが深まらない子供の変容につながる教師の手立てを試行錯誤しながら見出し、各教科における「学びをつなぐ教育」の具体化を目指す。

#### ③「学びの環境づくり」に関連して

子供が学びをつなぐ環境づくりについて模索し、具体的な働きかけを見出すことを目指す。さらに教師間、学年間、学校全体など、教師同士の横のつながりを強め、互いの教育実践を共有することで、教師自身も学ぶ環境をつくる。

## (3) 前期の振り返りから

### ①見とりを生かした子供理解について

「見とり」と「子供理解」に密接な関わりがあることは言うまでもないことだが、教師が見とった子供の姿をどのように生かすのかということが話題となった。主に2つの目的があることがわかった。1つ目は、子供の「やる気スイッチやトリガーとなること」を探るためである。子供の意欲や探究心を引き出すきっかけを教師が理解できれば、より充実した学習が設定でき、個別の支援もしやすくなるだろう。2つ目は、教師と子供における様々な「認識のずれ」を理解するためである。こうしたずれに対しては、その間を埋めていく必要がある場合もあるが、逆にずれを利用して授業をより深めていく方法もある。例えば、教師の発問が子供の考えたいことと上手く一致することは稀なことであろう。それを教師が意識することで授業プランを柔軟に変更したり、子供の考えたいことに近づけたりしながら発問を修正していくことができる。また、子ども自身が自分の認識とのずれに気づくことで、「あれ？おかしいな」「もっと考えてみたい」と、学習意欲が高まる場面もある。教師はそういった授業づくりを意識しているのである。

次に、「見とりの質」についての話題である。そもそも「見とりの質が高まった状態」とはどのようなことか、という問いを今後は解決していく必要がある。だが、見とりの目的を焦点化したり、教師の働きかけを減らしたりすることで、よりじっくりと見とることができ、質の向上につながる

可能性が見えてきた。さらに、教科の特性によって見とる対象や内容にも相違があるようだ。

最後に、「見とり方」についての話題である。教師は2通りの見とりを行っているようだ。1つ目は、子供の心の様子である。2つ目は、子供の学びの様子（評価や資質・能力）である。また、見とりを「目的・内容・方法で分類してはどうか」という意見もあり、見とりの具体的な方法について吟味する上で示唆となるものではないだろうか。

## ②教科の専門性の向上について

教科の専門性を向上させることは、個々の教師にとって大切なことではないだろうか。そこで、学年の横のつながりを強め、共通実践に取り組む例が見られた。学年の中で、自分の専門教科についての指導計画を作成し、他学級にも同じように授業に取り組んでもらう方法があった。また、自分の専門教科における授業実践を学年で共有し合い、個々の授業を充実させていく方法もあった。いずれの方法においても教師個々の専門性が高まり、それと同時に子供の実態を共有することで、子供理解にも良い影響を与えるようだ。

また、教科特有の見方・考え方についても話題となった。各教科が持つ特質に応じた教科の目（見方・考え方）を、子供に育てていけるようにすることは大切なことである。それだけでなく、「子供と共につくる」という意見も出された。その場合、子供が表出した見方・考え方を蓄積する方法と、元々は抽象的な各教科の見方・考え方を、子供と共に具体的な言葉に置き換えていくという方法が提案されていた。

## ③学びの環境づくりについて

高学年においてはICT活用への可能性を模索するものが多かった。子供が自己の学びを見つめ直したり自覚したりする道具として、1人1台端末は効果を発揮するようだ。また、ICT活用で表現活動の幅も広がりが出てくる。低学年においては、教師自身も子供の学びを促進する「環境のひとつ」という意識が高いようだ。教師は問いかけたり、尋ねたりすることで子供の学びを深めている。さらに子供自身が決める場や、対話の場を増やすことで、学びの自覚化にもつなげている。

そして、子供同士が安心してつながり合える、対話できる環境づくり（学級経営）は、どの学年においても大切にされているようだ。

## ④その他

今年度は3つの視点についての「具体化」を研究の内容としている。しかし、教師の「働きかけや手立て」といった事は具体的であるものの、子供にとってネガティブなメッセージを送ることにもなりかねないので、注意深く行なっていく必要があることが意見として挙げられた。「こう在らねばならない」「できることが良い」といった価値観を押し付けるような形にならないように気をつけたい。

また、「働きかけや活動等を詰めすぎないこと」に留意する必要があるという意見もあった。つまりそれは、教師も子供も「余白が大切ではないか」という言葉で表現されていた。時間的・精神的な余白（余白）があることで、子供には様々なプラスの影響が生まれるようだ。それについてはここでは詳述しない。教師にとっても、互いに学び合い、質の高い実践を創り上げていくためには余白が大切になってくるのではないかという示唆を得ることができた。

#### (4) 後期の振り返りから

年度末に、年間を通した実践について振り返りを行なった。後期は3つの視点の中から、「見とりを生かした子供理解」「教科の専門性の向上」について振り返りを行った。「学びの環境づくり」については、残り2つの視点について話し合う中で自然と話題に挙がるであろうと考えたため、振り返りの項目からは外した。そして、研究のまとめとして「学びをつなぐ」ことについても協議を行った。話題に上がった内容から、次年度の取り組みへの示唆を得たい。

##### ①見とりを生かした子供理解について

共通して述べられていたことは、「見とりは複雑で難しい営みである」ということであった。そのため、各教諭によって見とりの方法も様々であった。例えば以下のような方法である。

- ・まずは整理表を意識せずに自然に見とる
- ・まずは自然に見とり、あとから整理表に当てはめたり、整理表で振り返ったりする
- ・整理表を活用しようとしたが、いつの間にか教科の見方・考え方に注目していた
- ・整理表の中から見とる力を焦点化して（教師が選んで）、継続的に見とる

整理表は見とりの視点として活用できる可能性を秘めていると感じるものの、日常的に活用するには工夫や修正が必要であることが見えてきた。また、見とりの質を高めていくためにも次年度は整理表を整理し直し、より効果的な活用方法を吟味する必要があるだろう。整理表の項目数を絞るなどして焦点化して活用する、見とった子供の姿を蓄積した後に整理表を活用して分析をする、といった使い方が見出された。

また、見とりについては動画などを視聴して「他の教諭と共に同じ子供の同じ場面を見とる」ことで、見とり方の違いに気づくことができ、見とりの幅が広がっていく。他の教諭に自身の学級の子供を見とってもらうことで、子供の新しい一面に気づき、教師自身も見とり方の示唆を得られるようだ。さらに、見とりには「知識がないと見とることが難しいのではないか」という意見も出された。今後は、「見とるために必要な知識とは何か」ということも吟味し、共通理解を図って行く必要があるだろう。

##### ②教科の専門性の向上について

教科の専門性を向上させる上で効果的だったことで多く挙げられていたのが、共同研究者の存在であった。自分とは異なった視点を得られたり、教材研究を深めたりする上で、共同研究者は大きな力となったようである。授業改善や授業づくりも、見とりと同じように複雑で難解な営みである。教師一人で考えるには限界があり、より多角的な視点で教育活動を模索するためにも、専門的な知識を備えた共同研究者との協働的な研究体制は維持していきたい。

また、その他にも以下のようなことが話題に挙がった。

- ・自分が「子供の何を見とろうとしているのか」を意識する
- ・授業前に見とる視点を明確に持つておく（教科の見方・考え方など）
- ・教師自身はその教科の見方・考え方を発揮している姿を、子供に見せる
- ・ある教科の授業を学年全体で共通実践することで、教材研究の視点が得られる（深まる）
- ・子供にとってタイムリーな「子供が考えたい資料や教材」を活用する

教科の専門性が高まっていくにつれて、教師自身が自分を振り返ったり、新たな自分に気づいたりすることが多いようだ。これまでは気に留めることのなかった論文に注目する、子供の見とり方

に変化が起こる、教材研究の視点が変わるなど、各々が自己更新を経験している様子であった。また、教科の専門性は、「同僚と共に学び合うこと」「見とりの質を高めること」により、相乗効果で向上していくことも見えてきた。

### ③学びをつなぐについて

「学びがつながるとは何か」ということについて、ある子供の考えを聞いて、仲間から「なるほど」「やってみたい」という声が上がったのであれば、「学びがつながった」と言ってもよいのではないか、という意見があった。つまり、「学びをつなぐ」とは「子供同士をつなぐ」ことであり、実際にこのような意識を重視する意見は多かった。子供同士をつなぐ方法は様々にあるので、話題となったことから3つ例を挙げる。1つ目はある視点（授業の目標など）に対して、子供が様々な見方をする。それを教師が価値付けながらつないでいくという方法。2つ目は教師が子供の対話をつなげることで、子供が違いに気づき新しい考えが生まれるという方法。3つ目は授業で教師と発表する子供ばかりがつながっていた状況から、教師が「(ある子供の意見に対して)君たちはどう思う?」と問い返すことで、子供が仲間の意見にも耳を傾けるようになるという方法だ。これらは対話や協働的な学びを重視することで、学びが豊かになることを目指しているとも捉えられる。こうした実践を繰り返す中で、子供が主体的な学びを展開する姿が見られるようになったが、「なぜそうなったのか」ということについては、今後丁寧に吟味したい。

他にも、「子供のつぶやきを全体につなぐ」という意見があった。これは、授業を「教師スタート」ではなく「子供スタート」で展開する方法である。授業を、教師が事前に準備した言葉やもので展開するのではなく、子供の言葉を授業展開にフル活用するという考え方だ。その際ポイントとなるのは、子供の考えのずれをつくことである。そうすることで、子供は「話したい」という気持ちになり、授業へのめり込んでいくようだ。

最後に、「学びをつなぐ」とは「学びが学校以外の場でつながること」だと捉える考えも出された。汎用的な資質・能力は、学校以外の場でも自然と活用されることにこそ、その価値があるのかもしれない。資質・能力を発揮する子供の姿を、どのようにして見とるのかということも今後も模索していく必要があるだろう。

(5) 2年次の研究における取り組み内容及び、成果と課題

2年次は、教師が「学びをつなぐ」ために必要な3つの視点についての授業実践を積み重ね、リフレクションを行なった。本校の研究は現在も進行中であり、常に更新し、探究し続けるという意識であることから、あえて「成果と課題」という文言は使わない。そこで、成果は「明らかになってきたこと」、課題は「今後明らかにしたいこと」という文言に置き換えた。

学びをつなぐために必要な3つの視点	○明らかになってきたこと    ▲今後明らかにしたいこと
①見とりを生かした子供理解	<p>○見とった子供の姿をどう生かすのか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子供のやる気スイッチやトリガーを探る</li> <li>・教師と子供の認識のずれを理解する</li> <li>・上記2つを生かして授業改善へとつなげる</li> </ul> <p>○教師は何を見とっているのか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・子供の心の様子</li> <li>・子供の学びの様子（評価や資質・能力）</li> </ul> <p>○複数の教師で「子供の同じ場面を見とる」ことで、互いの見とり方の違いに気づき、見とりの幅が広がった</p> <p>▲見とりの質が高まった状態とはどのようなことか</p> <p>▲教師にとって「見とるために必要な知識」があるのではないか</p> <p>▲整理表を日常的に活用するには、更なる工夫や修正，焦点化が必要である</p>
②教科の専門性の向上	<p>○学年の横のつながりを強め、共通実践に取り組む例</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の専門教科についての指導計画を作成し、全学級で同じように取り組んでもらう</li> <li>・自分の専門教科における授業実践を共有し合い、個々の授業を充実させていく</li> </ul> <p>○自分とは違った視点を得られ、教科の専門性を深めることができる共同研究者の存在は大きい</p> <p>▲教科特有の目（見方・考え方）をどう育てるか</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・授業で子供が表出した見方・考え方を蓄積して可視化する</li> <li>・各教科の抽象的な見方・考え方を、子供と共に具体的な言葉に置き換えていく</li> <li>・明らかになってきたことも多いが、今後も積極的・意識的に取り組んでいく必要がある</li> </ul>
③学びの環境づくり	<p>○子供同士が安心してつながり合える、対話できる環境づくりや学級経営は、どの学級でも大切にされている</p> <p>○特に高学年においては、1人1台端末を効果的に活用するための方法について、様々な実践をすることができた</p> <p>○特に低学年においては、教師自身も子供の学びを促進する「環境のひとつ」である</p> <p>▲子供の主体的で能動的な学びを促進するために、どのような環境づくりをしていくのか、今後も探究を続けていく必要がある</p>

## 4 本年度の研究

### (1) 本年度の研究について

本校における教育のゴールは学校教育目標の具現化であり、子供の資質・能力の育成である。つまり、研究主題にある「学びをつなぐ」ことは1つの方法であり、それ自体は目的ではない。それを踏まえた上で、「学びをつなぐ」という教師の意識が、子供の資質・能力の育成に寄与するであろうと考えて研究を進めてきた。教師が子供一人一人の学びを丁寧に見とり、協働的な学びの場へとつなげることが、本校研究の軸となっている。

しかし、昨年度の研究で本校教師の授業づくりにおける悩みとして、最も多く挙げられたものは「子供の見とり」に関することであった。具体的には以下の3つである。

- 教師にとって「見とりの質が高まった状態」とはどのようなことか
- 見とるために必要な「教師の知識や技能」とは何か
- 「資質・能力を発揮する子供の姿」をどのようにして見とるのか

子供の資質・能力の育成を目指す授業づくりにおいては、教師による丁寧な見とりが必要不可欠であるものの、見とりをすればするほど、その奥深さと難しさに直面する現状があった。そこで、授業づくりにおける視点の明確化を目指し、本年度（3年次）は副題として『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実』という文言を加えた。

そして、研究の更なる深化のために、琉球大学における共同研究推進委員会の機能化と更なる充実を図った。本年度からは共同研究推進ワーキンググループを発足し、校内の研究推進会議に大学教員も参加し、共に研究の方向性を吟味するようにした。

### (2) 研究方法について

本年度も、年度当初に各教科等における「学びをつなぐために大切なこと」を確認し共有する。そして、各教科等において課題となる子供の姿から、課題解決に向けた具体的な働きかけを見出し、実践していく研究とする。その際、年間を通じて細かなPDCAサイクルを回すことを意識する。つまり、課題となる子供の姿に対して教師が働きかけ、その後の子供の変容を見とり（評価）、さらに働きかけを修正する、といった試行錯誤の連続である。このようにして、「学びをつなぐ教育の創造」を求める授業実践を行う。

また、本年度はこれまでの研究における「学びをつなぐための3つの視点」に加えて、副題の視点も意識しながら授業づくりを行なっていく。そのため、校内研究の場においては、まずは教師自身が共に語り合い、協働的に学び合うことを目指し、アウトプットの場を多く設定する。ワークショップやリフレクション等の時間及び、校内研究終了後はセルフリフレクション（自己内省察）の時間を、毎回設定することとした。

### (3) 研究内容について

本年度の研究では、子供自身が「学びをつなぐ」姿を目指して、教師が「学びをつなぐ」ために必要な3つの視点について授業実践を積み重ね、主題にせまっていける。加えて、副題『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実』という新たな視点を心得、授業づくりの研究を進める。

<参考文献>

- ・ショーン, D. (2001). 『専門家の知恵：反省的实践家は行為しながら考える』 ゆみる出版
- ・松下佳代(2007). 構成主義の学習観 田中耕治(編) 『よくわかる授業論』 ミネルヴァ書房
- ・三宅なおみ(編) (2016). 『協調学習とは』 北大路書房
- ・奈須正裕(2017). 『「資質・能力」と学びのメカニズム』 東洋館出版社